

障害と美学

—身体論的な観点から

伊藤亜紗(東京工業大学)

アメリカの美学者トビン・シバーズによれば、「障害という視点は、伝統的な美学に対して挑戦を挑むもの」である。なぜなら伝統的な美学は、身体を抽象的で画一化されたものとして概念化する傾向が強く、現実の身体が多様性に十分向き合っていなかったからである。もっとも、美学と障害を結びつける研究がなかったわけではない。たとえば美と醜をめぐる美学的議論は、障害の社会的受容に関わる問題として、障害学に対してもインパクトを与えてきた。とはいえこうした研究はあくまで障害の表象を分析することに主眼があり、障害者の生身の身体と向き合っているとは言いがたいものであった。

こうした不足を補うため、発表者はこれまで、視覚障害者を中心とする身体障害者に対してインタビューやワークショップを行い、彼らが自らの身体や感覚をどのようにとらえているのか、聞き取り調査を行ってきた。本発表の第一の目的は、その作業から見えてきた障害者の身体の特徴について報告することである。

しかしながら、自らの身体や感覚についての障害者の発言は、単に障害者の身体の特徴を解明する手がかりとなるだけではないことが、調査の課程で次第に明らかになった。すなわちそれは、身体についての我々の考え方そのものに対する問いかけを含んでいるのである。彼らの発言が我々の身体観に対して更新を迫るポイントは、大きく分けて以下の二点である。まず「五感を基本的枠組として人間の感覚的能力を捉えることの限界」である。たとえば視覚障害者は、手で触ることによって点字を理解する。しかしその認識の方式は、従来触覚論の枠組みで論じられてきた内容を超えて、むしろ視覚との親和性を持つような方式なのである。ふたつめは「身体の可塑性」である。中途失明者等の場合は、リハビリを通して、これまで使っていなかった身体の機能を鍛え、環境との関係を再構築する必要に迫られる。こうした身体の本質的な変化は、伝統的な身体論においてはあまり論じられてこなかった点である。以上二点から見えてくるのは、障害者の身体を、健常者の身体に比べて欠落した身体としてではなく、健常者が用いていない潜在的な機能を発揮している身体としてとらえる可能性である。本発表の第二の目的は、障害を通して見えてくるこうした身体観について、過去の美学や哲学における身体をめぐる言説を援用しながら、整理することである。

ところで、こうした当事者の言葉は主観的なものにすぎず、学としての身体論の素材とすることはできないのではないか、という批判がありえるかもしれない。本発表の第三の目的は、こうした方法論上の想定される問題点を整理し、それを乗り越えるための解決策を見いだすことである。具体的には、ケアの現場において主に精神障害の当事者たちによってなされている「当事者研究」を参照し、そのアカデミックな研究としての価値づけをめぐる議論に手がかりを求めよう。